

満文中の漢語語彙の表記

中村雅之

1. 借用語彙としての漢語

清代の満洲語には多くの漢語語彙が使用されるが、それらは概ね三つのレベルに分けられる。

- i) 漢語語彙であることが明確に意識されているもの。
- ii) 古い借用語で、満洲語の中にかなり溶け込んでいるもの。
- iii) 上記二類の中間的なもの。

第一類は、各字音が完全に分ち書きされる点に特徴がある。第二類は、分ち書きがなされず、その音形も第一類とは異なる。第三類は、音形は第一類と同じだが、分ち書きされない。

以下、『金瓶梅』の満洲語訳(1708年)と『清字解学士詩』(成書年不明)の中から漢語語彙を拾いながら、具体的に検討してみたい¹。

2. 第一類の漢語語彙

第一類に属するものは、字音の表記に徹しており、一字音ずつ分ち書きをする。以下の例では、a)が書名・人名・地名・年号など、b)が一般語彙である。(ローマ字転写は一般的に行われているメレンドルフ方式による。)

<金瓶梅>

- a) 「金瓶梅(gin ping mei)」「西遊記(si io gi)」「西門慶(si men king)」「潘金蓮(pan gin liyan)」
- b) 「文章(wen jang)」「袈裟(giya ša)」「象棋(siyang ki)」「大官人(da guwan žin)」

<清字解学士詩>

- a) 「江西(giyang si)」「北京(be ging)(行末行頭にあり)」「解縉(hiyai jin)(人名)」「洪武(hūng u)(年号)」
- b) 「学士(hiyo ši / hiyo sy / hiyoo ši)」「豆腐(deo fu)」「学生(hiyoo seng)」「官人(guwan žin)」「進士(jin sy)(行末行頭にあり)」

これらの例のうち、「北京」について、中嶋 1994 は「規範化形式では、**beging** のように綴る」と述べる。本例は「be」が行末にあり、「ging」が次の行頭にあるため、分ち書きされているが、この例だけでは常に分ち書きするとは言えない。実際、第三類に挙げた「尚書」(役職名)は、通常分ち書きされないが、スペースの関係で行をまたいで分ち書きされた例が見える。

『金瓶梅』の「象棋」は分ち書きされているが、『清字解学士詩』では同じ綴りで連書されてい

¹ 『金瓶梅』満洲語訳については、大英図書館所蔵本のコピー(吉池幸一氏より拝借)、および以下の翻字・翻訳による。

早田輝洋 1998『満文金瓶梅訳注』, 東京: 第一書房。

『清字解学士詩』については、以下の翻字・翻訳・影印による。

中嶋幹起 1994「北京図書館蔵『清字解学士詩』の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究 46・47 合併号 創立 30 周年記念号1』。

る。

「学士」には数種の表記が見える。規範化された表記ならば、「学」については文言音「hiyo /hio/」、白話音「hiyoo /hiau/」であることが期待されるが、本資料は中嶋氏によれば規範化以前の資料であるらしく、両者がともに文言音/hio/を表記した可能性もある。また「士」には「ši」と「sy」の表記があり、前者が規範化された綴りに一致する。後者の「sy」は、「学生」の「生 seng」や「侍読」の「侍 sy」などと同様に、審母・禪母を「s」で記した例。

「豆腐」には分ち書きをしない表記「defu」もある。(次節参照)

3. 第二類の表記

第二類は 17 世紀初頭以前に満洲語に入り込んでいたと思われる語彙で、音形も後の規範化された字音とは異なる。また、分ち書きをしない。

<金瓶梅>

「道士 (dooose)」「和尚 (hūwašan)」「焼餅 (šobin)」

<清字解学士詩>

「豆腐 (defu)」「椅子 (ise)」「和尚 (hoošan)」「師傅 (sefu)」

まず、「士」「子」「師」を一律に「se」とすることが注目される。このほかに、「対聯」に当たる「duise」も恐らく「対子」に由来するのであろう。ピンインの「zi/ci/si/zhi/chi/shi」に相当する音節を初期の満洲語では多くの場合「se」として受け入れたことが窺われる。

「豆腐」は初期満洲語に取り入れられた形式が「defu」、漢語語彙であることを意識した場合の形式が「deo fu」で、『清字解学士詩』ではこの二様の形式がともに見える。「豆 de」や「焼餅」の「焼 šo」のように、漢語の二重母音が単母音化しているのは、生活語彙として早い段階で満洲語に取り入れられた語であることを示している。

「和尚」は、二つの資料で音形が異なっている。中嶋氏によれば、「hūwašan」の方が規範化された綴りである。

4. 第三類

上記の第一類と第二類の間と言えるのが、第三類である。分ち書きはされないが、音形が明確に字音として意識されている。

<金瓶梅>

「將軍 (jiyanggiyūn)」「雙陸 (šuwanglu)」「牡丹 (modan / mudan)」「太監 (taigiyan)」「鳳凰 (funghūwang)」「知県 (jyhiyan)」

<清字解学士詩>

「象棋 (siyangki)」「將軍 (jiyanggiyūn)」「鳳凰 (funghūwang)」「太監 (taigiya[n])²」「尚書 šangšu (行末行頭で分ち例あり)」「老爺 (looye)」「帖子 (tiyedz)」

² 『清字解学士詩』では「太監」の綴りが語末の「n」を脱している。満洲文字では語末の「a」と「n」が同形であるため、単独形式のみでは「a」を脱した「taigiya[n]」のようにも見える。しかし、複数形として「taigiya[n]sa」という形式が確認できることから、この資料では(習慣的に)「n」を脱した「taigiya」であると確認できる。通常の字音と異なる点からすれば、限りなく第二類に近い。

これらの第三類は、はじめ第一類のように分ち書きされていたものが後に連書されるようになったものか、あるいは比較的早期に入り込んでいた語彙で、綴りだけが後に規範的なものに修正されたものか未詳。この点については、より広範な資料の検討が必要になろう。

5. まとめ

第三類の位置づけは保留するとして、第一類と第二類の対比は明瞭である。第一類の音形は漢字音を分析的にとらえたもので、満文の中にあっても漢語語彙であることが一目瞭然の綴りになっている。一方、第二類は耳に聞こえた漢語音を満洲語として受容・再現したもので、その綴りに外来語らしさが見られない。第二類は印象的な音形、第一類は分析的な音形とすることができよう。日本語において、ともに英語「**American**」に由来する語でありながら、初期には「メリケン粉」、後には「アメリカン・コーヒー」のように、「印象的」な音形から「分析的」な音形へと変化している。満文における漢語語彙と同様であり、「印象的」から「分析的」への進行が借用語彙表記の一般的傾向なのであろう。

第一類の分析的な音形は、清代漢語音を理解する上での重要な資料になることは言を俟たない。一方、第二類の表記は、満洲文字の表記史に貴重な示唆を与えてくれる。例えば、[sɿ]を表す満洲文字表記「sy」がなぜ「sa」の右側に二画（「く」状の記号）を加えた形になっているのか。それは、[sɿ]に対応する第二類の表記が「se」であることから判明する。すなわち、「se」が「sa」の右側に一点（「\」状の記号）を加えた形であり、それにさらに一点（「ノ」状の記号）を加えて[sɿ]を表す「sy」を作ったのである。つまり「se」に識別記号を加えて新たに「sy」を作ったことになる。印象的な第二類の表記「se」から分析的な第一類の「sy」が作られた。（「道士 doose」と「進士 jin sy」を参照せよ）³

今回は『金瓶梅』満洲語訳と『清字解学士詩』という二種の資料のみを検討したが、第二類および第三類の表記については、より多くの文献、とりわけ無圈点満洲文字資料を検討の対象にする必要がある。

³ 初期の満洲語における借用漢語は主に遼寧省などの漢語音に基づく可能性がある。「士」や「師」なども[sɿ]ではなく[sɿ]と発音されていたのであろう。